書類從 三百五十四

内閣文庫
和書
類 三八三六八
號 九
冊 八
函 二六
架 二六

内閣文庫
番號 和 38368
冊數 91 (76)
函號 261 8

国立公文書館
National Archives of Japan

羣書類從卷第三百五十四

兵部

検校保己一集

成通卿口傳日記

三十箇條

一末乃ものゝ事

一人數の事

一上手ものゝ事

一初度の鞠の事

一初めて鞠をあゝ事

国立公文書館
National Archives of Japan

一あしもとの人あしの事
一御目付時分のゆるまひの事
一合羽やまとの事
一鞠の場よりもちて拾ひとさる事
一すり鼻よりの付島帽子の事
一こしのかたたうもくあり申事
一御りんの髪の事
一末の下雑所をもとる事
一ちうもくの事
一長つくなるもぬるこたちの事
一きわてくこみこもつ屋敷
一大木ようひ切つか御目付事
一よる切なくきつの日こ屋くちむ屋かくさる事
一やまたに練る事
一鞠あしの饗膳事
一御目付場にもて他ゆいくさる事
一鞠之所ゆるしかれ時の事
一やまもとあんこよりの人あるへき事
一ものこ来をもて紙御目付ちの事
一目付大木のりもちて屋すき事

一五月廿日紙子二千日鞠をいの事たる事
一ちり鞠の如紙乃事
一わらはのくつ紙事
一紙くをにけいる事
一象はれ〳〵くもきの事
一紙ちり紙の事
一はのうんけのときしん
一はのちりくはたの紙はをはしはをはへる事
一盛長鞠あるときはたる事

成通卿口傳日記

紙鞠紙ちのみて後懸乃下に立事七月日甚うるはしく見とうすを紙を事二月晦日より陰人すると
時の鞠乃上をとはの紙をはしくはひて
鞠をはくとものく物をする事うてかすと百余あけく
おちぬさきにこれを鞠をとるを物紙二ほうけて一の
棚ハ陰ると紙物くの佐ふをいろ
かるをへてこへの一をはりそのの都紙をて
鞠紙作る鞠を皆紙をよはくく袋紙をへて勸盃あり
三獻の後弟は能物のくをうてほうつる五献をまたをて

毎ノ様ハ阿闍梨によろしき人にハ櫃の蓋に御祈の筆
をは懐紙におくりにおして故かく此輩をかく
此事日まちんとて燈臺をちかくよせて是をする
と兒桐にむかひつる鞠の庭に人によろこびさりかあや
しく思ひありと思ひて顔ハ人にて手足ハ身猿にて
三四歳はかりなる兒三人手ハかけをりて鞠のくゝり
め総にたちくはたりけるを御覧しけるに其ちかきなる者
をこあらく思えハ御鞠の精なりとこそいふものしくなり
是ハ又御鞠の事を語人ゆかし思召す千日の清
もてはなく此鞠を給わりて懐中にもちて柳の文字の

事様成も御鞠の事をはくまさむきこうにけり
たるなるはかのくりんと成志はしめす處といふを
御覧をもとて眉にかかりたるか髪をと押あく一人の
額にハ春楊花と云文字ありけり一人の額にハ夏安林
いふ文字ありけり一人の額にハ秋園と云文字ありけり文
字はこれ今迄ありかくて我路文成久我をりしに
あさ面にて相府もさるほとなりしとき又鞠の精にいふ
鞠ハ常によろし其時はからず而の有職者て云此鞠
はさ兒はかけりに御庵りにては御鞠は是時に
柳志を兒楪をさよろしく而く此木によそみ也御庵りある

まぬ世はなくまぬ世よハ國さかへ人好人ゐなり福あり
壽なかく病なく一生世をそよくいと殺人間あさ
う人ゐかさるゐいのちあかく病をすく福あるん事ハ
さりや生世ゐて云ゐなきていつとさて
鶴の精ゆて云ゐよさをたかゐ世をさるなをた
人の身ハ一日ゐくらたくなを紀思ゐる光
羅なゐる鶴をこのゐを給人ハ皆産ゐたを給ゐ
後ハ鶴の事ゐりゐ知ゐ事なをてハ
自然ゐ生世をこの縁ゐる功德ゐてこをなゐす
ゐの国を拾ゐ産きゐ世ゐ鶴の恩を答ゐ紙ゐハ

本法ゐひゐて美仕ハ川ゐ国ゐ世ゐ但産鶴の
恩好あゐ産ゐ本ゐ本ゐ紙ゐ美仕ハかゐこあ
事也今ゐ後ハさゐ国あゐ恩ゐ紙ゐれ
ゐゐハ恩ゐ国ゐなゐ世ゐ世ゐ鶴ゐ
ゐくゐゐ本ゐ国ゐ云ゐ鶴ゐ恩ゐ
ゐ国ゐ紙ゐ本ゐ紙ゐ恩ゐ紙ゐ
やくゐと云ゐ紙ゐ紙ゐんゐ
故ゐゐ国ゐ紙ゐ鶴ゐ精ゐ額ゐん
紙ゐゐ鶴ゐ紙ゐ紙ゐ今ゐ
事ゐ紙ゐ紙ゐ紙ゐ紙ゐ

なす鞠代の間も人に来代いつも絶る代物ゝ
そなへ置申候事
一樹の下なる事
大木はかりは五人のさ小木のもとに三人とさる
地形枝のなり知り候よりたをひとりはきはすよりあり
まゝよりさるもの事なくうしろはむ角かたつゝ
引ゆて立人
一鞠人数はかり事
上ゆ八人より七人とさる角ゝ代ゝ
所作はかり四人立角ゝ

あり其道成たるしるしあるよ暫入きさしあるを紀
大木も小木も枝をも紀もたる事かゝ也もあり
はるゝ道は事をゝ宮ゝ紀れ事紀ゝあるを
上手ゝ宮ゝ云也能ゝ見て作るべき事也
但初ゝるかるもの事也
一ゝり是身小ゝ鞠事
ゝ是ゝのめは物のけゝ有ようひゝて是ゝ
是ゝ人を感ゝ優ゝゝ鞠成枝ゝかをけを
切りて是一是枝のゝゝ人ゝ有ゝすゝ分ゝ枝ひく
れゝるゝを左ゝを右ゝを優ゝ志ゝゝ紀ゝかゝゝ

ゝゝやゝゝゝ人面かゝゝゝゝゝゝゝ枝ゝ細ゝ
ゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紀事也
一是姫みゝ色是の事
よのゝゝゝゝ成ゝ紀ゝゝゝゝゝゝの事ゝゝゝ
右乃是成ゝ紀ゝゝゝゝゝゝゝゝ紀事也
又ゝゝゝ成ゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝ
是ゝ一ゝゝゝのゝゝゝ是ゝのひゝゝゝゝゝゝを
ゝ紀ゝゝゝゝ右ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
能くゝ紀ゝゝゝゝゝゝゝゝ右乃
ゝくゝゝ

一鞠乃時の面白振舞の事

少紙白紙と思召うすいの中より薄紙せんと
あれはかくみえくそのやうなる
是程うすき人なれ共はをとりもつかぬとて其の拍を
たつをは何とやうなる紙のうちう
ぬりとは多よりそをいふ紙をとり拍うち立たるあるを
又是をいはるむ人とたに白紙白紙ふすまみな
うやうしうちゆるくれ事れをとを
なてはたるみもりたにかをとをとうちをつまを
たををなれたてのはは白紙紙をめてうかをとうなる

一合足鞠を用事

一足程後ちからうに人よ白紙うく角一足事なく
ふうの合足いそく又一人して鞠をあたんと
角をすに二足めてもれたんと思角に沢一足をて
もるて二足りては三程きく見角足紙くの仏
つきよ思もむ方へ角程へ又膝しく鞠よあて
きもむうくるる用紙事也甚たうあれ
人も當座の盛もういそく強くの仏と知そをく
合足すれ事なる程
一鞠よきく馬きく鞠へ角に沢いたるを物よりの

とゝへ出ぬるに有わくわ
るたるきゝ紙ゝ三百枚
一鞠奥へ入時の事
きたる也又水引
ちゝあるをたるいとふ
くほうさきより野郎
一指貫結事
ゆゝゝゝ紙指をもち
なを指ゝん指より新
ゝるき鞠のゝ紙
ゝとゝゝく結新鞠の時

ゝ紙ゆゝゆゝ
ゝゝゝゝゝ紙ゝ
ちのゝゝゝ
一鞠のくゝ
膝ゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

めんと切の人鞠紙を小ぶりにして用ひ紙を重
なりひるるとその時ちうえる事をうくるとすれば
かなら次人をなる鞠よりかつきにの人の紙をも
うをかけ用ひちかつきあるべしむしろをすえを
えるはうるのりく事れ但みて紙を重ね
るなをもかくたるうへのちに事なるを
一本の本雑所紙しも色かたをの事
身はかをと紙をはをして加えるはたれえるき
事也天方上手の本始紙をえをはるよあるの
上手順して次はをとをどもるまをえ紀をうよ

立はその日乃鞠数をくて身の但上手のなを
かんよをるるひく思よりはは思つをもの紙
はれるはゆをもたれ用ひ

一袋乗事

狩衣はそくひよきをたる常の
上人のすをかは例乃をれうをみうをを
也指めを皆乃鼻よりみよ中間よをはく
うすあけてはもはをれたれをなかを
はれをを用かるは鞠あをる事の日あ紙
袴狩袴は皆乃をるよりうを結をた

くしたりけるをよ若なくなりたるこそ人を
きねよかとおもへとそれをとりそへて扇を賜へしへ
とのりたりけるき事はまうしうへしとそ十文
字をよさしたりかうりたりきうりいてくはさうへて
なりはもえたちひをそのはをを
やはりはの人あるをうしはりを指をたあるをひ
うりはの時神をうしはいてをむ間おすをて
おりかるを十文字をさしたれをくはをを
をはりすちるをなをををうるをよく
うるを違事ありおりうをのはををを

扇紙れはをををはりをををををををををを
をををを扇をたのおをむ人をれをうををはををを
一春はをくなりたる事をの事
をはをを指葉を後鞠ををかひて歌をををををををを
はををををををををををををををををををををを
一本紙をたくはををををををををををををををを
はる事の事也懸かりて鞠かをををををのを
也をはの鞠首ををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを
をりあひをををををををををををををををを

たゝすたてゝ申べく候事

一大木よりおひたる鞠の事　四ようの人を思ふ人首をも
長實卿の御そくいをまつ我も公卿の位
すとゝのへ給はゝ
ゆゝしき事なり
木よりおひたる事なれば又枝をかるゝ時は
いつれの方へなりとも行給ふべきなり
たゝ事也我いとゝかゝる
一上をおかく結縁の鞠の事　鞠を手に一上
鞠は来の時よりめよ日ごとに初てすさまじき事

さむ結縁なかるべきへの利潤不可嫌

一鞠をまきんをする事

二月はじめて五日毎すべし休事なくはしる
結んする事うゝ五日乃後ゝ
外ゝ多紙毎度のよまきんせる事すむ所のぶ
鞠のもの加うる此の事あるべし

一鞠を賞服する事

三君御ゝむ所ゝ義服後鳥羽院
すむ人ゝ身ゝ入給おのく所ゝ
ゝ人ゝ二ゝ日ゝ鞠は不受之所

今日代官より来りつゝ興行の事也

一鞠ゝたちくゝめくゝ色々仕事成出来ること鞠より
出成入ゝ面白ゝ事かゝるもとゝ八辞をとめて
ゝ面白ゝ事ゝ仕さひるの出来成すゝもゝくゝて
一鞠ゝ所ゝ有ゝす所也たかゝ紙八ゝけゝるもゝて立
ゝ面白ゝ事ゝ所ゝ有ゝとおもゝくゝ所ゝけゝよゝ
ゝ所ゝ有ゝ物ゝ成ゝ加ゝ有ゝ所ゝ有ゝ人ゝ鳥
帽子代ゝ小ゝ面ゝ子成ゝ紙ゝ目ゝ付ゝん
打ゝ付ゝ物ゝ成ゝ有ゝ成ゝ紙ゝ成ゝ鞠ゝ所ゝ有ゝ
物ゝ面ゝ小ゝ所ゝ有ゝ成ゝ成ゝ所ゝ有ゝ

生ゝ成ゝ成ゝ成ゝ面ゝ小ゝ鞠ゝ成ゝ面ゝ事ゝ成ゝ
所ゝ有ゝ面ゝ成ゝ成ゝ成ゝ有ゝ成ゝ有ゝ事ゝ
一見所の事

又ゝ成ゝ成ゝ鞠ゝ成ゝ有ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ
成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ
人ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ
成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ

一中木切立成鞠ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ
木八鞠成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ
成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ成ゝ

如何にかくのごとくかたんぬ仏法本末の
ひとん所へ祈らゝ偽りて世をたぶらかす鞠紙あけくるもむ
ものと和尚ものを紙切をいとんの如くうたるを
ゝ祈とのちらく鞠乃いるるたる事いとくんをし
鞠後の時山城前司基俊をかたらひて
事をかるるをさして所々ものかふかをたをえ
むせの事をいとくしとの如く今も貴を親鸞の本の
切をゝ鞠乃あ人を振舞事をるるをいとくしく
如何の御をを解事紙いとく熊野へ千余度参り
たる功徳をして三悪道へ落る者となんを極楽

知見ひとをゝ御ゝ法をたるを
一紙を抜して外をるをはめて所をず紀事也大木乃
枝をを紙中へ入をる鞠をいとくれをも安く者
一紙鞠を好ゝ事
日紙不願をを二子日をるを其間病者に対ハ外なをも
鞠紙をを宛を大雨をなるをしに大極殿へ行
をを何事をゝ屋ゝ小をの人ハむしも今をたを
いとをゝ大方鞠の屋ゝ事日をかをを七子
日迄をの外いへのうちよ小鞠をあくを紙をを対をゝ
いを月乃歌何法をを及をたちのの燈台火乃

覚しても稽古をせしかは人ありけることそ申はひるかに
一 聊かなる事なれと絶説無に不思議しく侍るか
碁盤上にて沓紙をはきあしのかはりなく小鞠を置
き碁盤の上にて沓の音あまる音せすして地にあるなれ
鞠のおとはかすかに侍る十人はかり見とをりてはきかす侍りけるに
思ひたり又我同し沓の音はかりもきこえけれとも碁盤
乃うへにて沓をとかんに拍子をとすみしかるらんやはまた
はかりなく鞠をはかく乗に音をも起す事不思儀の事
一 よは沓や我又待兒にても君はる尋候と思へ覚へてく
なまし沓のよにはかりなく侍の肩紙

あらて碁盤の上は様に沓紙を絶てからへ沙弥より
鞠紙なくして肩に法師侍き人なりきとて常に
ては肩紙又婦肩て頸をとらへて各二返にて思紙
あらく鞠をもみとなりなくかへて脚の法沓
は肩にかそとかも見えてかけ蹴鞠をまはせんする
あかりし也沓待侍る侍に沓乃
かへるまのの事ありたる也
まそくなとなく知とわかき侍返とおもひて和光
かんしあまかくて不思儀乃鞠をやつらきれぬへく
きくへくはひき

一坂卿殿法水よりのとりをはきものこと所
ゆくものうち八人を内のつまくまるもの
鞠紙ものこと〻くゑくゑくあるくよ清水寺の
つまくゑ舞台のうる棚紙皆ときあるくわくうる
見んとゑくゑ仏法ゑしてしりてくんくよ同の此ゑん
鞠ところみむとゆひるまくゑ皆とゑ紀寺
高欄乃上紙ゑんくうる西へかゑまゑ東へ
ゑ切るゑて東へ風ゑくゑふ鞠とゆきて返ゑ
ゑゑ内ゑるくゑ四人ゑ人帯位の僧七八人狩侍
雑色三四人ゑ紙ゑんて
しはゆ内ゆくゑもゑゑ

中くとゑくるゑけゑて見きゑ紙ゑくゑてう
卿殿ゑゆを行くるゑんゑゑの事紙ゑくゑて
するゑくゑゑくるゑもゑて遣出くく
一月ゑゆるゑゑゑゑゑくき観音知見せゑを遣
出ゑりあるゑて鞠を行くゑゑ
行ゑくゑるき
一其事ゑゑなゑゑとゑ不思儀ゑれの志ゑ
日ゑくく鞠と知てゑくゑの行ゑゑて中へゑゑゑを
ゆくゑゑ見勝鞠雲入ゑゑて思くゑ行きて紙ゑゑ
すくゑたゑゑくゑあくゑゑ辻子風ゑゑ

あかね傾くまで見物す法師たちはいとはかなしの給はよ
きこえてさや風やあまりえんなる見物にてかと成ぬるを
かけし給ては鞠雲の中へや入なんと見えし
為みにさま思儀の事になりぬや
一　熊野へまいりてうしろ向の後ろうしろ向の鞠
西へまはし百度東へまはし百度二度して二百度あまりて
却きさはして鞠をまはし姫持ちて甚深西は座
前の通夜の夜よ別当常住みな見物せし人
とも此鞠をもてなし見物の人々別当にのみてかたり
のちにこれもんとうまいらせさんとてかの紀の薬紙

抄て見給と思ふく拾ひの紀たる事にそのなま紀乃紫
手に有りかたしけなき事にて是をなりて今まで
蹴鞠のまはりは中に有るは一にその南御まで
思えてきこえし儀は事になりぬや
一　坊門殿のかたまりのかたまり簾もかけぬ東の方にて紙
引入よと沙汰もせずしてさかりたまはりみな一紀あるを見
をしかるに東は本よりまさしく数鞠紙するまは
却てさへかみすまで立寄て侍るにまみの方その方へ御まし
於け御かまで有りなしを後おちぬ程にて轅の方まで
くるまかえさる時に鞠紙庭へ出たる轅の方ちゃいや

居らんと云へるは是みのをとり方なるを越
て意へいふてき見物せし人のをもるあり（注略）
す故郷殿見所よりそもをかの事よりなるを世
をもかくもいふをさよりはくるを鞠をそかとくなる
はるをいふをもんやとすを先はしめを車をとりし車
三輌をもいたをそをひすをひよりおかえはを方を二方に
物て一三物にはをすよくるをもえたるを記つるを
んをそかはををよりをもはぬかうをのをんをよ
えるををを鞠乃ををはるを業を殿をるををはをを
一本乃ををよををんを枝をおをれをはをををへはるを

やしく見る枝物ををとはをををのはをはをを
枝を鞠はををす枝をねをはをの事をりをの枝小
はるをはるを事はををあをんをれをはるをは
中にはををくをるを殿をををはを沙汰をを
を枝をあをりはれをを枝にをを枝にはぬをはを
のをはをもをくををはををくを

一昔盛長（守イ）（淡路ノ人源）
愚を鞠乃はは老ををめを鞠をたをすを見をはるを
をり我十郎の対鞠をたちはるをりし紙
件のをもををををはの殿はは来の

国立公文書館
National Archives of Japan

き鞠足にて拭ひ清むる人なるべき相を
らきてけちられ初の初めは鞠の足
踏そをかつそくいひそ人を新事あるを
きつるもをもちは事をくさくさしてそうしき
鞠の足にしたがくかはれ清くかるる
下品のものく雪紙をくて鞠紙おいて事はを
拭ひ清めのなくそを多なる鞠いをくくるも
又をひをするものとすることをすくくはを
足よりをくさんは時はけこなれはをぬをき
事也人のいうはもむをよそてのうちくよ鞠

をくそそ鞠をはをは清めを知を特身はぬを
るひをふをををひをうは延あをくく
きはをあり地鞠は初めぬをはたうひぬをを
きをつをはいみをを事也鞠をは是あを亟
をを知をうけそなをるをえすはををを
しをはをを拭をを足をなをあり足踏をはふうひ
をを新物ををを人はは我ををちては
や清をうは足ぬをそはをををはかひをえを壁長を
鞠をはをよはは清を人須をを鞠の事はをを紙ハ
清をを乃ハをいをを人成鞠はをはをすはは

とうすると也故寧相乃事武衛うたてさうもよ
さんぬへし山城の新(頼輔)入道とすのようのものの
ふるくさくさる信濃入道すなわちすなんすると也
ものかりの鞠乃精たるひとさる事なるへし也
紙鞠の事も如不思議やうの法也へさるを又為つる
さうもの事も如何加也今はその程よ
鞠は心はちかう紙入ものにはかはるへ
ちなきもの事さるを事みくあり
勿論人よりよりたるもの事也
但ものもの始終ものを紙をへしとうたるもの

るうしてをうへさるくとうたんいひてするくも鞠さの
はんへふちかけをそかくるをしまるかくもん
人よりさるやうたは似ものの事ぬ紙をせむ
もをんてう事さのうんはくもへ若しうをを
武(云朱坂)来うくめはよるうもの事はをを思へをとを
何をはあなうちはをて事はをやをのの
さるをしうなをいうそう武場ういうん事紙
ものうえんいるをしをたうするめたうを
ふあ絵の事はをへるものはをりへよをそ
うるをの事いうけをもをうけはるよ

[illegible]

建久六年十月廿六日賜藻壁殿　右大將　陽本書畢本代
規模物也可秘之〻〻勿不可他見
鎌倉若宮別當
法眼定曉記之

蹴鞠略記

尤親衛負外亜將藤雅経撰

夫蹴鞠者尋源於千載之遐武為嚴千万春之歡遊
雖世繼踵号握翫而人得心号傳稀宴是非為之難
能為之難也其躰遐分其趣旁多將就一樣性有得
失亦兼多説身不足恐抽故實之肝心以備此綽之
自足分篇於十二省詞於万一而已

一　身躰者手持足踏顔持腰仕等也手持者無難傍人
可翔樹間足踏者不違拍子如浮涯上顔持者
儼肅壁言猶葵藿之向日腰仕者嬋娟弱可似楊柳之
麁風凡以自身雖量假他眼可知支躰相應可為嚴